

◆書評◆

小川公代著

『ケアの倫理とエンパワメント』

(講談社 2021年 ISBN 978-4-06-524539-2 1500円+税)



片山 亜紀

(獨協大学 外国語学部英語学科)

本書は、キャロル・ギリガンの『もうひとつの声』(1982年)を出発点としつつ、ギリガンの提唱した〈ケアの倫理〉をイギリス文学と日本文学の作品群に見出す試みである。2020年12月～2021年3月に『群像』に掲載された三つの論考をもとにしており、その折々の時事的な話題と行き来する形で論が進められる。2019年12月に最初の新型コロナウイルス感染が報告されてから一年後、コロナ禍の日本社会の先行きがまだまだ不透明な中で書かれ、時代状況の記録としても読むことができる。

序章では、著者が〈ケアの倫理〉に出会うまでの経緯がたどられる。著者は1990年代に大学で政治・社会学を専攻し、ギリガンが「弱者たる女性たちが孤立することなく連帯していく〈ケア〉や〈共感〉の価値を再評価しようとする」(11頁)ことに心揺さぶられたという。そこから女性パートタイム労働者にインタビュー調査

を行うが、内面の思いまで聞き取ることはできなかった。そこで研究分野を文学に変更し、文学作品を手がかりに、ケア労働の背後の内面世界について考えることにした。ところが実社会においてそうであるように、文学研究においても〈ケア〉の価値は評価されていないことに著者は気づく。このような気づきのもと、著者は〈ケア〉や〈共感〉について新しい示唆をもたらす作家と作品を論じていく。

第1章はヴァージニア・ウルフ論である。著者はウルフの人生と作品を照らし合わせつつ、作品が「いかにケアの倫理に基づいたエンパワメントにつながるのか」(40-41頁)を探る。たとえばウルフの小説『灯台へ』(1927年)のラムジー夫人は、ウルフの亡き母ジュリア・スティーブンをモデルにしている。ジュリアは夫および親族のケアに忙殺され、49歳にして亡くなった。著者がウルフの評論「女性にとっての職業」(1931年)から推測する

に、ジュリアの「家庭の天使」としての生き方は「反面教師」的で、ウルフは文芸批評家であった父レズリー・スティーブンにならい、「女性でありながらも」職業人となった(31～33頁)。同様に先行世代の生き方を見ながら自分の生き方を編み出すという試行錯誤を、ウルフは『灯台へ』において、ラムジー家の別荘の泊まり客であり画家のリリー・ブリスコウに行わせている。ウルフおよびブリスコウは、先行世代の女らしさと男らしさを組み合わせた生き方を選んでおり、これはウルフが評論『自分ひとりの部屋』(1929年)で提唱する「両性具有的な精神」につながると著者は推察する(48頁)。

さらに、ウルフが『灯台へ』において複数の人物の内面世界を拡大して書いていることにも著者は注目する。哲学者ジョルジョ・アガンベンは「計測される客観的な」〈クロノスの時間〉と「身体を伴って経験する主観的な」〈カイロスの時間〉を区別しており(51頁)、ウルフは〈カイロスの時間〉を表出させる。ラムジー夫人の内面描写からは「配慮」(55頁)が、リリーの内面描写からはリリーが「ラムジー夫人の『家庭の天使』としての苦勞に寄り添うことのできる」(54頁)さまが、そして二人がそれぞれ波動のメタファーを使い、身体感覚を交えて世界を知覚している様子がうかがえる。著者によれば、これらはチャールズ・テイラーのいう「多孔的な自己」(22, 56頁)——「個」の確立を目指す

近代社会において抑圧されがちな自己感覚——の表れである。

第2章はクィア文学論で、三人の作家による逸脱的な関係性の物語が考察される。

男性同性愛が犯罪化されていた19世紀イギリスにあって、オスカー・ワイルドは法廷で同性愛をスキャンダラスに暴かれ、2年間の重労働つき懲役刑に服した。ワイルドの作品の随所に著者は〈ケアの倫理〉を見る。たとえば裁判以前に書かれた童話群では「他者に奉仕するという点において、ケアの倫理が通底している」(92頁)。刑務所内で書かれた書簡集『獄中記』(1897年に書かれ、1905年、ワイルドの死後に出版)では、ワイルドはキリストを「苦しみに満ち、混沌とした声なき全世界を自分の王国とし、自らをその世界の時を超えた代弁者とした」人物と形容する。著者はそこに「ケアに関する洞察」(96頁)があると論じる。

三島由紀夫は、同性愛がタブー視されていた20世紀日本にあって同性愛を公にしなかったが、同性愛者としてのものの見方を『金閣寺』(1956年)と『美しい星』(1962年)に反映させた。『金閣寺』を出版した年に三島は青年たちと御輿をかつぐという体験をしており、そこで得た「『同苦』の概念」(110頁)から、テイラーのいう「多孔的な自己」の感覚をつかんだ。『美しい星』では宇宙人でありながら人間の身体をもつ大杉重一郎が、死を待

ちながら人間全般の傷つきやすさに共感を寄せる。

多和田葉子はドイツ在住の作家で、意表をつく言語表現、設定、多国籍性に特色がある。『献灯使』(2014年)では、高齢の義郎が「迷いや逡巡を創造性に変えて」(118頁)病弱な曾孫の世話をする過程に〈ケアの倫理〉を著者は見ている。『星に仄めかされて』(2020年)における多様な人々が一緒に歩いていくイメージには、「互いの偏見や誤解を取り除く」ための「『水平』に広げられた視野」(122頁)がある。

第3章では、近代社会の目指してきた「個」——健全な白人男性をモデルとする——とは異なる主体感覚を表現してきた男性作家たちが取り上げられる。

19世紀のロマン派詩人サミュエル・テイラー・コウルリッジは奴隷制反対運動に通じていた。この運動は〈共感〉など情動の働きを重視するもので、〈ケアの倫理〉の源流である。コウルリッジの有名な物語詩「老水夫の歌」(1798年)は、「奴隷制の恐ろしい罪の意識」(152頁)を読者と分かち合う作品と解釈できる。

モダニズム詩人T・S・エリオットは、1920～30年代に発表した一連の詩でスウィーニーという「思考が空洞化された獣性」(159頁)を象徴する男性を登場させる。エリオットの先輩格にあたるジョゼフ・コンラッドの『闇の奥』(1899年)では、ヨーロッパ人男性クルツがアフリカ

で象牙収集に取りつかれ墮落したことが獣性のイメージとともに語られ、エリオットはコンラッドに多くを負う。

ヨーロッパ文学にも日本の近代文学にも造詣の深い平野啓一郎は、デビュー作『日蝕』(1998年)の神学僧ニコラ、『葬送第一部』(2002年)のドラクロワとショパンの姉ルドヴィカ、『本心』(2021年)の石川朔也などを通して、「人間の苦しみに共感する語り」(173頁)を実践する。

全体に、著者はギリガンを批判的に継承するジョアン・C・トロントの『ケアするのは誰か?——新しい民主主義のかたちへ』(邦訳は2020年)を援用し、文学研究、時事問題、フェミニスト倫理学、政治思想などの接合を試みる。その開かれた姿勢には学ぶべきものがあるが、たとえばウルフの『自分ひとりの部屋』において、ウルフがシャーロット・ブロンテの作中人物ジェイン・エアの語りとして引用しているものをウルフ本人の主張と取り違えたまま議論が進められる(47頁)など、立論と論証のさらなる精緻化は必要である。

〈ケア〉文学研究には、他にも川崎明子『ブロンテ小説における病いと看護』(2015年)、佐々木亜紀子ほか編『ケアを描く——育児と介護の現代小説』(2019年)などがある。併せ読まれ検討されることで、文学および文学研究が〈ケア〉を基盤とする社会構築に寄与することを心から期待したい。

